

北里柴三郎博士と日本医師会

小 泉 ひろみ

(秋田県医師会 会長)



2024年7月3日、我が国において新札が発行され、千円札の肖像画はこれまでの野口英世博士から北里柴三郎博士となった。この2人は師弟関係（北里博士が自身の伝染病研究所において「師」。野口博士がアメリカへ渡って働くことになったのには、北里博士の援助があった）にあり、道程は全く違ったものであったが、豪快な人柄も似ており、さらに重要なことは、それぞれの手法は異なるが、同じく伝染病の研究にその一生を捧げたということである。

さて、このたび紙幣の顔としてバトンを引き継いだ北里柴三郎博士は、破傷風菌の純粹培養、抗毒素の発見、ペスト菌の発見など感染症研究への貢献のみならず、実は慶応大学医学部の再興、そして日本医師会の創立にも大きな業績を残した方である。

今回、医師会活動に関わる者として、「研究者である北里博士が、何故、日本医師会の創立に関与したのか」という疑問がわき、少し調べてみることにした。現在の日本医師会は、2012年にノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥博士も会員であり、勤務医会員数の方が開業医会員数より多くなっているが、もともと開業医の団体であるというイメージが強い組織である。主に研究者で組織されている日本医学会とは車の両輪のように医学界を走ってきた印象があるため、私の中に先のような疑問がわいた。

結論から言うと、いくつかの要因があり、偶然もあったが、北里博士が日本医師会の創立に関わったのは、必然であったということである。

○北里博士の人柄

北里博士は熊本県生まれで、母は武士の家系であった。母譲りの負けず嫌いな性格、終始一貫するという強い意志を持ち、「熱と誠意があれば何事でも達成できる」という信念は、現在の北里研究所においても引き継がれている。

当初、北里博士は医師になる気はなく、武士、軍人、政治家などを志していたようである。

結局いろいろあって医師になったが、生涯「実学」を重視する方であった。医学において、研究の成果を予防活動や診療活動に活かすことで社会に還元し、社会の発展に寄与しようというものである。「研究と治療を1つに」、「病気を未然に防ぎたい」と考え、様々な治療法や予防法を開発、実践し、実際に富を得た時期もあった。後年、日本の産学連携の先駆者でもあり、2015年にノーベル生理学・医学賞を受賞した北里大学の大村智教授が、海外の製薬会社などとのライセンス契約で得られたロイヤリティ収入をアフリカのマラリア治療に充てたことは有名だが、大村教授はさらに北里大学メディカルセンターの開設にも活用するなど、ここでも北里博士の理念の継承を見ることができる。

研究においては、時に相手研究者の間違いを正すなどして闘うこともあり、味方も多かったが敵も多かった。本人は、師と仰ぐ方や恩を受けた方への忠義ともいえる忠誠心、部下への徹底的な面倒見の良さがあったが、性格は「ドンネル（ドイツ語で雷おやじ）」とあだ名をつけられることでもわかるように、激しさもあったと言われている。また、生涯の師匠であるコッ

ホ博士の要請もあり、自分の研究のために、役所からの帰国命令を無視したり、直接天皇陛下から資金を受けたりするなどして、反感を買うことも多かったようである。しかし部下への面倒見は良かったので、伝染病研究所からたくさんの人材が育ち、地方にも行き活躍をした。

○伝染病研究所移管問題の勃発

1892年北里博士が、ドイツから帰国後「日本においても伝染病に特化した研究機関が必要」と政府に懇願し設立した、日本初の伝染病研究所は、後には内務省の所属になったが最初は私立から始まった。この頃から物心共に支えてくれたのは福澤諭吉であった。「日本の近代化は公衆衛生の近代化とともに構築されるべきである」という北里博士の信念は、福澤翁の信念と共鳴したと思われる。しかし、1914年、伝染病研究所が内務省から文部省に移管となり、東京大学の元に置かれることになったため、北里博士はここを去り、自らの北里研究所を設立することになった。

○当時の医師会の有り様

医師の集まりである医師会であるが、明治の初めまでは、医師というと漢方医が大半であった。その後、政府は欧米医学を修めた者のみを医師として開業を許可することとなった。これにより、漢方存続運動がおこり、その運動に対抗する意味や互いの研修や親睦を目的に、任意の業種団体として医師会が各地域に設立された。1906年に内務省の医師会規則により、官公立病院以外の医療施設で医業に従事する医師は、全てその所在地の郡市医師会員になり、道府県医師会が設立されると、管内の郡市医師会員は全てその会員になることとなった。今は任意の入会であるが、この頃は、全員入会する仕組みであった。1922年に改正医師会令で日本医師会についての規定ができた。

これに先立ち、1916年に北里博士、高木兼寛博士らによって、初めての全国組織である大日本医師会(会長：高木兼寛)が設立されたが、その後医師会令の改正もあり、1923年に法定の日本医師会が誕生し、初代会長に北里柴三郎博士が就任した。

これらのことから、当時の医師の団体は、強いリーダーシップが求められた黎明の時期であったと思われる。時代が急速に変化していく中で、研究のみならず、実学に重きを置く人物として北里博士がリーダーに選ばれたのは、必然であったのだろう。たまたま、伝染病研究所の移管問題で、北里博士が所長を退官されたことも何らかの関与はあるとは思われるが、逆に北里研究所を発展させていくという多忙な時期でもあったにもかかわらず、それを押してまで医師会会長になられたのは、自らの意志があったと言わざるを得ない。

おまけに、北里博士が秋田にいらしたという内容を発見した。博士は、1884年秋田にいらしたようである。東京大学を卒業後、内務省衛生局に就職し、この年上司2名らと東北、北海道衛生巡視に出た際、秋田で犬養毅氏(後の総理大臣。当時、現在の秋田魁新報で主筆として舌鋒をふるっていた)と会ったようである。犬養氏が「衛生について」の講演を博士の上司に依頼したが、彼らは衛生をよく理解しておらず、結局北里博士が講演したとのことである。終了後の宴会で主席に座ったとのこと、豪快に飲み語ったのではないだろうか。このようなエピソードも、実は官僚の反感を買ったのではないかとあった。その後も講演で秋田にいらしたようであった。各地域の府県衛生課長はほとんどが北里研究所の門下生であり、府県における北里派の勢力は強力なものであった。開業医と府県衛生課は密な関係にあり、地方の開業医らが北里博士の衛生や予防の考え方の薫陶を受けたことは想像できる。